

かのみゆる池べにたてるそがきくのまげみさえだの色のてこらさ

〔奥義抄^三〕そがきくは黄菊なり、承和のみかどは、よるづの物きなる色をめたまひて、菊もきなるを愛したまひける也、されば承和菊と黄なるをいふ也、或物には、一本菊をいふ也、さればこそまげみさえだとは、よみたれとはいへれど、一本きくならずとも、えだなかるべきやうなし、又黄菊の一本ぎくにてありけるを、みてもよめりけん、みぎのことばにつきて、一本菊といふべきにあらず、色のてこらさとは、いろのてりこきさまをよめり、まげみさえだとは、しやしと云也。

〔白石紳書^八〕一己亥^{四年}享保春三月に聞く、長崎伊豫守元仲の従者に高田勘四郎と云もの、京師彼やしきの庭際にうへ置し色々の菊ども、其苗をうつし栽る事をわすれて、初に植しまゝにて、三年の後に花の開きしを見しに、種々の花皆々黄色なる花と成たり、是をおもふに、是はもと黄なるものなるを、人の力にて種々のかわりも出来しにやといふ也、此者元來無學のものにて、菊は黄色を正色とするなど云事を知れるにもあらず、たゞくその見る所に據りて、いひし所也、尤以て奇妙と云べし、人力の天に勝つ所ありと見へしがと、その天なるものは得て加ふべからざる所有なり、人の心術爰につきて、心得有べき事なれば、其人の名をも、詳にこゝにしろし置る也、さらば當時さまぐの奇花あるも、たとへば人に酒をすゝめて、其醉狂を見て戯とするが如し、返す返す不可然事也。

〔桂林漫録^下〕菊變艾

連歌師阪昌周、東都山伏井戸ニ僑居ノトキ、隣家ノ老父菊ヲ好テ作リケルガ、長ヲ延サズシテ、花ヲ開カシメン事ヲ欲シ、年々切ツメ、菊コミケル程ニ、二三年ノ後、變ジテ艾ト爲リヌ、唐艾ノ名宜ナリト、昌周ガ云ケル由、予^中桂川ガ幼ナルトキ、杉田老醫、先考國訓法眼へ語リケルヲ、思ヒ出ダ